
白光の日々

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白光の日々

【Zマーク】

Z9023E

【作者名】

柊葉一

【あらすじ】

目が覚めると、左手には鎖に繋がれた手錠。そして無機質で真白な部屋。どうしてこんなことになつていいのか、美紀には何も分からなかつた。

第一話

田の前に飛び込んできたのは、自分のものと思われる手だった。

松浦美紀はぼうっとした意識で起き上がる。

洗いたてのようなま白いシーツが爪に引っ掛けた。そこで気がつく。

左手を胸の高さまで上げる。少しの重みと、じゃらりといふ音。左の手首に、手錠がかけられていた。そしてその手錠の先には鎖が繋がれており、その鎖は部屋の隅のステンレス造りのポールに巻きつけられていた。

美紀の頭はよつやく、異常を認識した。

「なに、これ……」よつやく、声を絞り出す。

周りを見渡す。何の変哲もない、無機質で殺風景な部屋だった。美紀が座り込んでいるベッドは、枕側を壁に沿って置かれていた。ベットから正面を向いた白い壁に、扉が一つある。しかし、その扉までの遠さが、この部屋の広さを証明していた。美紀が左を向くと、すぐそこにも扉があった。美紀はゆっくりとベッドから降りる。その時、自分の足が震えていることが分かった。

じゅりと音を立てて、鎖がベッドから落ちる。その音に一度振り返りながら、美紀はその扉を開ける。おそるおそる中を覗き込むと、白いタイルの床、左手に清潔そうな洗面台、右手には白い洋式の便器、その奥には半透明のガラスの仕切りがあり、一メートルほどの隙間からガラスの向こう側へいけるようになっていたようだつた。レストルームのようだと判断して、美紀はその扉を閉じる。

どこかへつながっているのではという期待は、裏切られる形になつた。

じりじりと現実感が迫ってきて、美紀は自分の置かれた状況を理解できなくなつていた。

ここは、どこ?どうして手錠なんかにつながっているのか……第一、

自分がいつ眠ってしまったのかという記憶も曖昧だ。

ベッドの向こう側は一面大きな窓が並んでいた。そこから、眩しいくらいの日差しが差し込んできている。

「誰か……」

意識せずに、言葉が漏れた。

「誰か、誰かいませんか！……すいません……！」

叫びながら、ふらつく足取りでもう一つの遠い扉へ歩き出す。

「誰か……っ」

急に、ぐん、と左手が引き留められる。足取りが勢いづいていたせいで、危うく後ろに転びそうになつた。
改めて左手の手錠の存在を確認させられて、美紀はそれを見つめた。たつた今擦つたのだろう。手首が赤くなっていた。
痛い。

普段は何とも感じない、小さな擦り傷の痛みさえ、今の美紀には涙を浮かべるには十分だつた。
分からぬ。落ち着けない。自分の動悸が、異様に早い気がした。座り込んだフローリングの床が冷たく、せっかく掴みかけた現実感を鈍らせる。まだ夢の中ではないのか。いや、むしろそうであつて欲しい。知らない場所。理解できない状況。これは自分の知つてゐる現実ではなかつた。

どこからともなく、足音が聞こえてきた。

美紀は一瞬、助けを求めて叫ぼうとしたが、思いとどまつた。そして耳を澄ませて、足音が自分がいるこの部屋に、近づいてきていると気付いた。

体が固くなるのを感じた。もしかしたら、自分をこんな状態にした張本人かもしれない。

足音はもうすぐそこまで来て、扉の前で止まつた。

ガチャリ、と鍵を回す音が聞こえて、美紀の3メートルほど前にある扉は、ゆっくりと内側に開いた。美紀は瞬きもせずに、それを見つめていた。

第一話

その扉から現れたのは、ひょろりと背の高い、白いシャツにゆるもうな黒のジーンズをはいた男だった。田深に前髪がかかつており、顔をはつきりと見ることができない。

美紀は座つたまま、手足をざつにか使って、強張つた体を後退させた。

男は扉を体で押えたまま、一度後ろ向きになつてかがみこむと、次に向き直つて部屋へ入つてきたときには、両手でトレイを持つていた。

美紀はじつと、その男の動作を見張つていた。問いただしたいことは山ほどあつたが、口に出すことは難しい。

男はトレイを持つたまま、ゆっくりと美紀の方に歩いてきた。美紀は驚いて、ガクガクした体で、さらにベッドの方へ後退する。美紀が動くたびに、手錠に繋がれた鎖が、じやらじやらと音を立てた。その間も、美紀は男を見つめ、睨みつけていた。

男は、先ほどまで美紀が座り込んでいたあたりまでくると、すっと立ち止まり、そこのかがみこんでトレイを置いた。ステンレスの丸いトレイの上には、皿にのつたロールパンが二つと、何かが入つた白いマグカップが乗つていた。

また男が立ち上がり、美紀もまた男の顔へ視線を戻す。といつても、隠された顔からは、表情は読み取れなかつた。

「松浦美紀さん」

急に男が言つた。美紀はびっくりして、奥二重の大きめの目が、さらによく見開かれた。

「気分はどう? 丁寧に運んだつもりだけど、どこか痛めたりしていない?」

意外な相手の問いに、美紀は戸惑いながらも頷いてみる。男は「そう、ならよかつた」とだけ答えた。

「……あなた誰？」

「やべ、声を出すことができた。これからは溢れるみたい、疑問

が飛び出してくる。

「なんであたしを知ってるの?」「リリィ?」「の……手錠、なんで

「落ち着いて」

男の声は、重く
静かに透った。

「落ち着けるわけ、ないでしょ」負けじと美紀は言った。相手の出

「僕は、ユズ井。僕が話を知ってるのよ、

男は視線をそらすように、窓のほうを見た。一面の窓には、白いカ

「え、何が何だ？」と、その色を窺がる。

「新編著者別文庫」

もりはないし、時期が来たら、逃がしてあげる」「

淡々と、そのエスキと、いう男は言った。まるで物語でも読み上げて

卷之三

「そうだね

「身代金が目的だつたら、無駄よ。ウチ、貧乏なんだから。大学だ

つて、あたしが特待生だから通わせてもらえてるんだもの」

בְּרִית מָהֳרָה

意に迷はないと、この風が何なのか分からなか
る

「とにかく、しじみぐく君にはせりにこむもひつかひ。欲しいものば、

言ってくれれば、可能なかぎり用意する。食事は、置いておくから、

モードルの

それだけ言うと、ユズキは扉のほうへ引き返していく。美紀はその後ろ姿が扉の向こうに消えるまで見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9023e/>

白光の日々

2010年10月28日03時30分発行